

「受験において、男女で合格点が違って良いのか？」

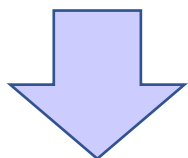
～男女の機会不平等とその背景について～

法政大学国際高校 2年 安藤浩誠

現状と問い「社会問題化したのち、多くの学校で廃止されてきてはいるが、まだまだ残っている」

これまでの経緯

男女別定員 = 男女の合格点が違う
 → 長い間、当たり前
 (戦後、70年続く)
 ※女子合格点が高く、男子が低い



2021年、社会問題化

「都立高校入試で男女別定員で
 800名が不合格」情報開示へ

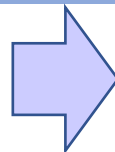


現状

2024年、都立高校は、全
 ての男女別定員廃止

主要共学校 2021年度中学入試結果

学校名	回数	募集人員		入試実質倍率		合格最低得点		満点
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	
青山学院		男女約140名		3.0倍	6.1倍	162点	191点	300点
慶應義塾中等部		約140名	約50名	5.6倍	6.4倍	非公表	非公表	300点
渋谷教育学園渋谷	1回	男女70名		2.8倍	3.7倍	179点	189点	300点
	2回	男女70名		2.2倍	3.9倍	174点	189点	300点
	3回	男女23名		5.7倍	11.4倍	202点	210点	300点
成蹊	1回	約45名	約40名	2.7倍	2.7倍	190点	197点	300点
	2回	約25名	約20名	3.6倍	4.7倍	184点	206点	300点
成城学園	1回	男女約75名		3.6倍	5.6倍	215点	221点	300点
	2回	男女約45名		7.8倍	9.3倍	224点	234点	300点
中央大学附属	1回	男女100名		2.8倍	3.5倍	非公表	非公表	320点
	2回	男女50名		4.3倍	7.8倍	非公表	非公表	320点
日本大学第二	1回	80名	80名	3.2倍	2.2倍	201点	191点	300点
	2回	40名	40名	6.7倍	4.4倍	218点	198点	300点
法政大学	1回	男女約50名		4.1倍	4.0倍	359点	376点	500点
	2回	男女約50名		5.3倍	6.2倍	388点	400点	500点
	3回	男女約40名		11.4倍	12.0倍	376点	383点	500点
法政大学第二	1回	90名	40名	3.6倍	5.2倍	250点	262点	350点
	2回	50名	30名	5.8倍	7.8倍	254点	266点	350点
明治大学明治	1回	約45名	約45名	2.6倍	3.5倍	221点	225点	350点
	2回	約30名	約30名	4.7倍	4.3倍	221点	225点	350点
早稲田実業		85名	40名	3.2倍	3.9倍	非公表	非公表	300点



問い

受験に男女別定員がある学校では、男女で合格点が違う。

性別による不平等が生まれているのではないか？

男女別合格点の違い = 男女不平等

現在、男女機会均等の考えから、
 解消されてきている



しかし、完全撤廃には至らない

なぜ？

多くの私立高校では、男女別定員を未だに廃止していない

私立校では、男女の比率さえも、「学校の教育的特徴」の一つとして今も考えられている

教育現場で、男女不平等が公然と認められてよいのだろうか？

構造

撤廃されない背景にある 4つの構造

①学校の運営上の都合（ハード面、ソフト面）

年度によって男女比が違っていると設備や施設面での過不足が生じる。トイレや更衣室の数、部活動などにも支障が出やすい

②歴史的背景

もともとは女子の教育機会を増やすことを目的としていた。歴史的に男女別定員があることが当たり前の時代が長く、男女別定員がそのまま残ってしまった。

③社会的背景

日本に経済優先主義の考え方が広く浸透し、外で稼ぐことに重きを置く社会的背景がある。男子が多い方が学校にとって、経済的メリットが生まれるという構造がある。

④私立学校の独自性

日本の私立校では、カリキュラムなど独自性を持たせることが出来る。性別に即した教育も、私立校の特色であり、男女比率調整を行う事も含まれることもある。

即効性のある解決策「入試結果の情報公開化」と、新たな問「本質的な解決策は何か？」

受験における不平等の解消

おそらく今後も、私立校を中心に男女別定員は残る。

男女別定員があっても不平等を生じさせなければ良い

男女別定員が
不平等を生むのではなく、男女別合格最低点の違いが不平等を生む

この問題の解決策

受験結果の個別公表

情報公開化の今の流れにも合致

入試結果が、受験生に対して公表されていないことが、男女の不平等を黙認している要因になっている。
なぜなら自分の試験の点数がわからないため、該当者として声を上げにくく、不満に感じにくいのである。

対処療法では、その問題を表面的にしか解決しない

新たな問い

なぜ長い間、この問題が見過ごされてきたのか？

2021年まで、誰も手を付けてこなかった。

女性に不利だから、容認されてきたのだろうか？
男性に不利なら、もっと早く解消されていた？

そもそも、

男女別定員は、本当に私立の特色なのか？
→それは、違う。特色と差別を混同している。

教育的特色の名の下で、社会が私立校の男女の不平等を黙認してしまっていることは、それを当たり前とする歴史的、社会的構造があり、構造主義による思い込みではないだろうか。

「男女平等にならないといけない」と思っても、「実際には、男性優位社会のまま、しかも世界共通」

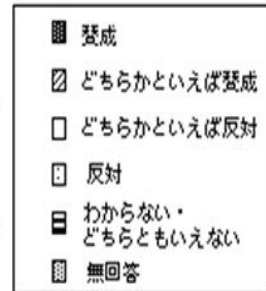
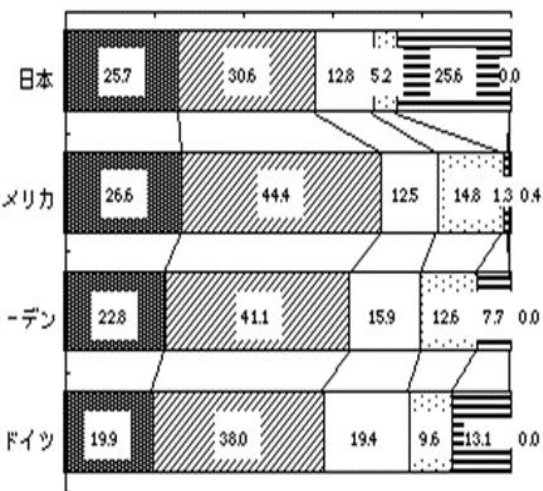
新たな問いに対する常識

積極的に女性差別を解消することは、大切！

男女共同参画の考え方が広がって来て、またSDGSにおけるジェンダー平等の解消を目標とする考えも強くなってきている。

「男女平等のアクションに賛成がほとんど」

0% 20% 40% 60% 80% 100%



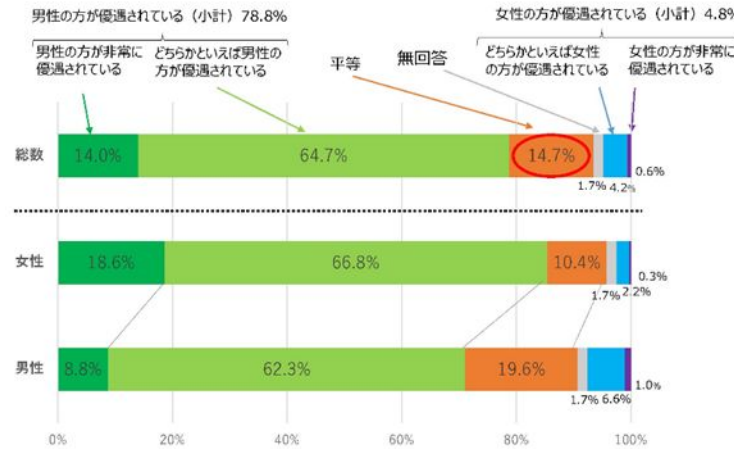
構造

男性優位社会の存在

「実際には日本は男女不平等。掛け声だけの男女平等が実態」

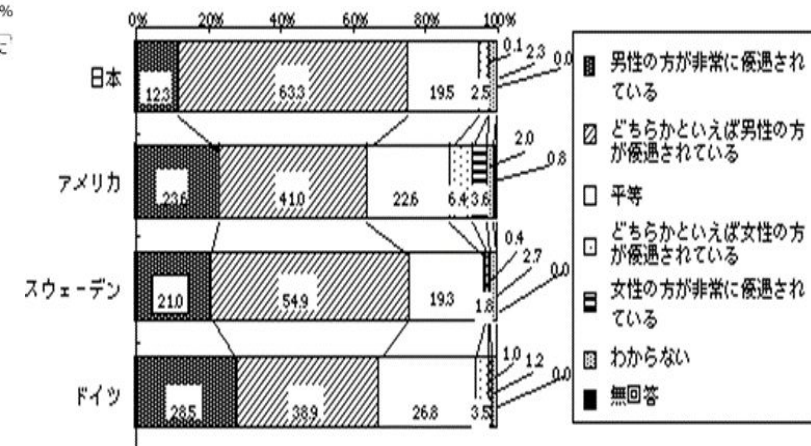
- 男女格差ランキングで、日本は 146か国中、118位
- 約80%の人が、日本は男性が優遇されていると考えている

社会全体における男女の地位の平等感



世界各国でも男性優位社会

- 但し、各国も、男性優位社会が存在



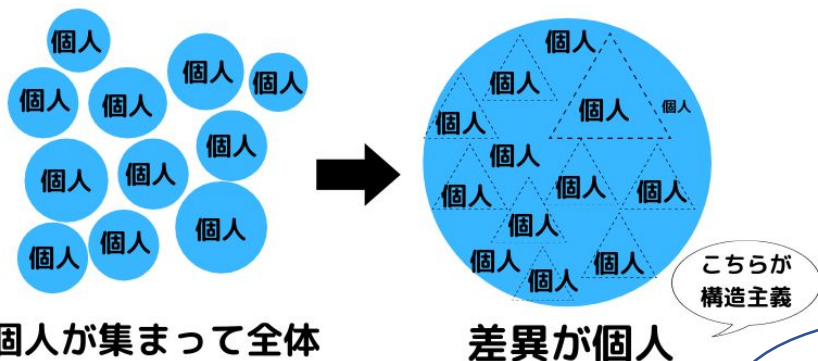
私の主張

日本において根深く存在する男性優位社会の存在が、いまだ多くの私立校で男女別定員が残っている背景にあると考え、完全撤廃できない要因ではないかと考える。
男性優位社会がこの問題の本質にあり、それは構造主義である。

～本質的な解とは～「男性優位社会の見直しが必要」

構造主義とは

人類共通の不変の構造もあるとするレヴィ・ストロースの考え



男性優位社会にも構造主義が存在する！

人類は、そもそも男性優位社会になる構造

理性がそれはダメだと歯止めをかけることで、男女平等社会を理想形とし、理性で作ろうとしている。

他国はいち早く意識的に男女平等を求めて変革をした。日本は努力が足りていないがゆえに世界146か国中、118位と遅れているのである。

新たな問に対する「解」

男性優位社会の改革

男女の合格点の違いから始まったこの問いに対する私の解として、最初は、入試結果の情報公開をすることで解決されるかと考えたが、本質的に考えると、この問いの背景には、男性優位であることの社会通念があることが問題であるとの結論に達した。

力の強い男性が優位になりがち

「意識の変革」

古くからある日本の男性優遇社会の意識を変えていくこと

「制度の変革」

政治が中心となり、積極的な法律も含めた制度改革が欠かせないと思う。給与、労働、教育などのすべての制度設計を男女平等の観点から作り直すことが必要

私の考える具体的解決策

意識変革

日本の男性優遇社会の意識を変えていくことが必要



アクション1

男性の育児や、家事への参加啓蒙活動

女性に対する理解を男性が深めるイベントや場の提供

幼少期からの教育による意識付け(教育の見直し)

友達や仲間とのワークショップの開催

制度変革

政治が中心となり、積極的な法律も含めた制度改革が欠かせないと考える。給与、労働、教育などのすべての制度設計を男女平等の観点から作り直すことが必要



アクション2

社会政策としては、男女同一賃金を達成できた会社には、補助金を出すとか、減税をするなど、企業経営でメリットが出るような仕掛けを作る。

議員の定数を、男女別に半々とする。(一定期間限定)
女子議員が半分になると、女性に地位向上に向けた施策が通りやすくなる。(但し女性優遇による男女不平等)
同じく、企業における役員の定数を男女別に半々とする。

女性の社会進出を更に促進する施策実施(保育延長等)

若年層の選挙での投票率の向上